

5

4

3

2

1

20

9

8

7

6

5

4

3

2

1

1m

0



殊年之禮既畢宿館青之接方始梅
小構角薦聲起人代時也無消
遣之宜則忘或流於游蕩行家
失於滯僻是以科官之家子游巧
小說入著競新奇字浮怪譏使
人心好之絕眾者使人渴六樹

國朝亦譚孫休排問錄十二卷去春
利其半以之世公復及之餘編矣妻
也退而閑讀之以為勸懲鵠
鳥誠之榮已以為標的互通
捨村之暇執之以為規矩閑空倦
繡以頃視之以為研討非夫子文

好要妄言亂教以賴併前而歸平
本末則猶滄海數珠供其掌中豐
城兩劍並佩腰間亦快本況才浮
六第、卷我先考周齊荷君守錢津也
不可以再序故題數行云文政丁亥
臘月立春之後齋大郎顛撰

通俗排風錄後集總目次

明斷之部

舟人呼商妻

詩讞

臘脂

卷七上

明斷之部

楊退菴

于總制

于中亟

李大守

魯大守

費公

大原獄

卷七下

義俠之部

錦衣獄賈

五人傳

鬚參軍傳

崔猛

附舟人

義盜

雲娘

飛瓊

義虎傳

大鳥

卷八

卷之九

玩世之部

申殷張 史癡 宋連璧 烏程夜遇 陶成
狗皮道士 雌雌兒 武風子 劉酒 周鐵墩

仙緣之部

尹鑿頭 王探花 蕤姓 楊忠烈 李煌
成御史 汪希文 河南某縣仙 薛衣道人
趙如如 松祖 羅道人 嶠山道士 宋道人
張谷山 邱生

卷之十

卷之土

靈異之部

吳二 雷殛逆子 賣米者 雷異三條 博興女
陶琰 俞保 神告記 周侍御 謝在杭
義優 義虎

寐覺比_松六樹園翁漫筆

全三冊

通俗排悶錄卷之七

明斷之部

目錄

舟人呼商妻

詩讞

脂

讞

通俗排悶錄卷之七上

明斷之部

目錄

舟人呼商妻

詩讞

臘

合三種

通俗排悶錄卷之七上

明斷之部

舟人呼商妻

六樹園翁譯
全亭正直校

一商賈。旅商ひよ行とく。裝載く昧爽。入舟よ衆。僕の来る
を待居。久く待共僕至ら。舟人輪貨のヨヌを見。且一身ゆく僕も
未至らず。殊ニ地へ僻寂みて外よ人も無。忽惡念を發し。今是
を圖る。古又。ひと易い。と窃ひ。急よ舟を艘出。其人を遂よ水中よ擠
く。殺し。其輪貨を携へて帰る。扱知らぞ頗つる。商家よ詣て遠く
門を轍多く向ひ。娘子何故館入。船よ下よ。おびざるや。と呼ち。り見。高
妻。敬。驚く。入をして。所々尋求させ。けども所在知らず。其僕み向。僕答く。

先程舟は到く尋つてども主人居えずと歸り來まうと云夫。うり
 彼方此地尋訪けども行方知せざる故。地理ニ斯と告報け。地理
 通を知縣ふ訴ふ。縣令是をやのく舟人及鄰比を召出しそ。詔
 訊。役費。復讐す
 れど卒々其状う。其後縣令數人の訊を歴々とを遂に決まる。能をき
 ま。斯く賢能の縣令至く。此條を咎せんと。先商妻を召く。人を辱け
 く其妻よ問く曰。當時舟人來く問一時の情状言語如何。妻曰。
 夫出去く良久。舟家來く門を叩ぬ。門未開く。遽く呼く
 申名。娘子何故。官人船ふ下らざると云ひく。外又何共云候。と答ふ。
 知縣乃婦を退し。舟人を召く。問へ答ふ所。妻の云ふ所。又符合せ
 も。知縣笑く曰。商を殺す者を汝已み自其罪を白せ。他の證を須

る。及舟と云々。舟人譁く。服せ。知縣怒く。曰。女來く。門を叩く
 時。主人を呼ぶ。妻を呼く。主人を問ふ。是汝心中。又主人家。又在ざる
 知る故。豈主人の家ふ在や否やを知る。尋る。主人を呼す。そ
 其妻を呼者あらん。や。汝速。情實を吐。と叱。やけ。舟人驚く。其
 罪に服。遂に其法を正。刑。行ひ。實。神明の政と謂づ。

詩讖

青列の居民。范小山と云者。筆を販を業と。此頃旅商。行く四箇月
 程。成。妻の賀氏。獨空房を守。居る。或微。夜。盗。殺。さ
 う。何者の所為。ある。知者。泥の中。扇。一握。遺。有。其扇。詩。を書
 た。王晟。と云者の書。て。吳蜚卿。と云人。贈。詩。王晟。何許の人

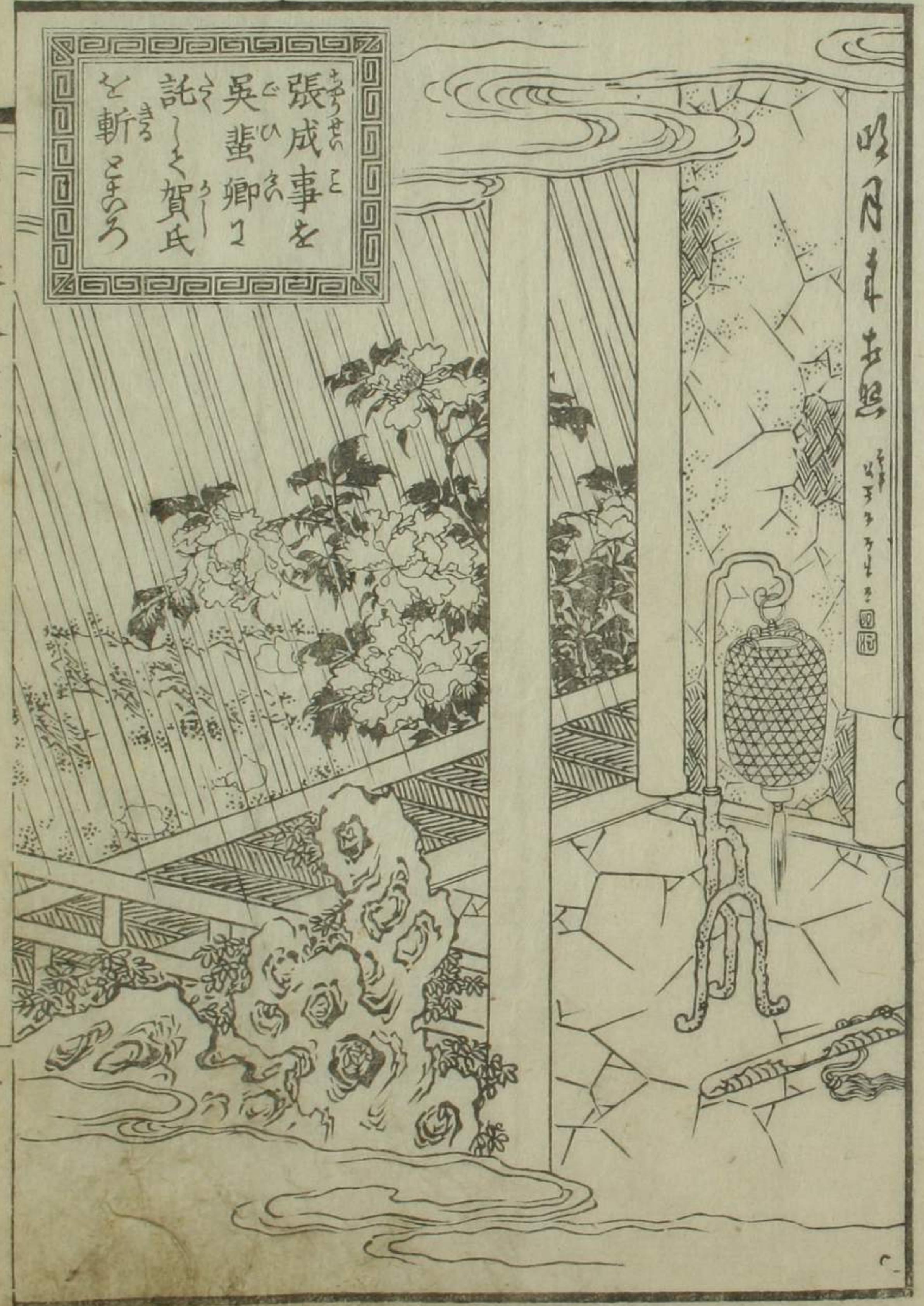
と云事を知らず。吳蜚卿ハ益都人。素封の人。多く范小山と同里う。平日頗佻達の行ある故。郡縣より召捕へ。併しこそをもあつざる。爰よも強く刑桔せよ。遂に誣く罪。即十餘の官人の往復を歷け。更に異幾無。又。吳蜚卿も今へ自必死と覺悟。田舎を貸す。賃斧。或日陰少の賂を。盜者。其夜の夢。神人。若玉。子死ると。驚鳥を覺ぬ。再睡。又同夢。今へ相下。内邊吉。との玉ふと。驚鳥を覺ぬ。再睡。又同夢。見け。鳩を飲む。止。待居。行程も。周元亮先生。と云。是道の分守。來。囚共を慮。吳蜚卿。至。周元亮。先。范小山。曰。吳蜚卿。人を殺。何の冤據。時。范小山。彼扇

を出。元亮。見せ。元亮扇を熟視。向。曰。王嚴。何者。皆答て。知ら。と白。元亮。此一件の書付。細閱一遍。立所。命。吳蜚卿。械を脱せ。監。出。倉ふ。是を見て。范小山。争。と。吳。蜚。人を殺。者。り。と云。元亮怒。曰。汝。其罪。正。す。入。殺。汝。便。予。と。實。汝。妻。殺。讒。人。を。あ。て。甜心。せん。と。心。あ。と。叱。と。衆。人。皆。元。亮。が。吳。蜚。卿。と。私。と。疑。ひ。と。敢。と。復。言。あ。者。う。元。亮。即。硃。簽。を。標。し。役。を。遣。し。立所。南。郭。地。う。某。の。肆。の。主。人。を。拘。へ。主。入。大。懼。其。故。を。知。る。う。府。至。や。と。元。亮。向。て。云。汝。が。肆。の。壁。東。莞。の。李。秀。が。侍。あ。何。時。題。せ。や。答。と。舊。歲。提。学。の。爰。來。や。ひ。一。時。二。三。の。秀。才。有。く。酒。を。

呑く醉く留題せらるり。住居へ何里あるう知らず候へどと云々と元亮遂
又役を遣し。日照坐みて李秀を拘へしも。秀即至てと云々。元亮怒く
曰。汝既み秀才と作る。奈何ぞ人を謀殺せらる。李秀錯愕く頓首し。但
覺えりと云ひ是が元亮扇を擲下く曰。是扇を視よ。爾が作る所と云
爾が書あ。何故詭く王晟と云々。元亮扇を擲下く曰。是扇を視く曰。詩を
真み小生が作る所ある。字を寔定み小生が書る所と云々。元
亮云汝が書ある所と云々。既に汝が詩を知る者の書ある所。
必ず汝が朋友あるべし。汝必此書を知る。誰が書ある者ぞ。李秀答て曰
行列の王佐が筆跡と云ふ。と云元亮即時み役を遣し。王佐を關拘
しむ。王佐至てと云々。元亮大喜く。盜此と在と云く。乃張成
表兄うなとりりと申けど。元亮大と云ふ。李秀が初と來り。時の如く云

る。王佐大と懼れくその所以を知らず。因て又扇を出一見せけれど。王
佐曰。此益都の鐵商張成と云者。某を頼く書せらる。王晟はその
表兄うなとりりと申けど。元亮大と喜く。盜此と在と云く。乃張成
を執し。張成至てと云ふ。一見く忽吐實。其眾ふ伏しき。初張成賀
氏が顏色の美うを窺見く。是を挑んと爲ども。不諧うんぬ恐れ。
吳蜚卿へ挑戦の入らる。吳よ託し。衆人皆信とせんと念ひけど。偽と吳が
扇を爲て執行く。諧べ乃自身の名を見。不諧うんぬ名を吳よ嫁く處
去んと爲ひ。始より實よ賀氏を殺さんと之へ思ひ。然ども賀氏
剛氣ある。生をとく。獨居常み刃を抜く自衛る。張成斯と云う。
喻く刃を以て入賀氏よ逼らんと云々を。賀氏既に覺く。張成が衣を捉へ刀を

張成事を
吳畫卿
託賀氏
を斬る



四月半古風

公了多乃生子圖



擧く起上アタシテ。張成懼キテ急ニ其刀を奪ひ取る。取リシテ取返シ
ト。色也。婦人の力奪ひ返す事成らモ。又身を脱るモノも成ざ所。故大
音やく號ひ立。張成甚窮。已むる代得也。遂ニ賀氏を殺し扇を
委く逃去。吳蜚卿が三年の冤獄を周元亮一朝解く。是をも
だ明白。裁断あらへ。寔ニ神明と稱せらる者也。吳蜚卿此時先年
の夢の告。内邊の吉凶。周の字うる事を始く悟也。然ど衆人
の疑ふるいを底解せ。口巴紳間を窺く。問け。周元亮笑く曰。是甚
知易。易る。細み爰書を閱る。賀氏が殺さる四月の上旬。殊ニ此
夜。陰雨の天氣猶寒。時。扇をりする物。忙迫の時。此不急物を携
く。累ひを増者あらん。是其害を入。嫁せんとする。察。知るべ事。

節向。南郭地也。兩遇。避。壁題。詩。筆頭。詩と口角相類。是故。何の凭據も無じ。妄度。先李秀を拘
ゑ。是。果。是。因。眞の盜を捕。得。偶中。云け。聞
者歎服。多。

臘脂

東昌。地。牛鑿。業。下翁。と云者。一人の女を生。小字を臘
脂。と名付。此女才。財。の入。勝。の。非。容姿。も。至。麗。一
久。十公翁。寶の如く。寵愛する事限。無。佳婿。を。清門。ア。予。も。と
の。も。ひ。け。世族の入。其寒賤。鄙。締盟。成。是故。十五六歳
及。共。縁づ。然。對。戸。の。龔姓。人の妻王氏。と云者。挑脱。七

善體うりうらぶ。朝夕の談友多く有る。或日王氏來て例の如く詰めて
 歸てゐるを女送り門際うらぶより怡好。美少年一人白足衣着て席が門前
 を過行ふ。其手采甚都うらけと女のか少一動たるや。うらよ少年を
 見かとけど此少年も首を低見て走行す。去る事既に遠けと云ふ。女を
 うら寝眺居てけど王氏其意を窺て戯れ。子の才貌を以て若入ふ
 配するるを得ば實に十分さんと云けれど女頬を暈紅すと一言を答へ
 シ。王氏又問く云此郎を識り玉みや否や女知りぞと答へ。主と云ふ。
 は。尾南巷の郢秋隼と云ふ秀才。父も孝廉も考へて一人を。妻向ふ
 南巷に住む。時鄰家の郎うらぶ。今素足衣を着て居る。妻死て其
 もゆきまし。暮り。もし未闕らる故也。子如一意有ば。言を傳へて承入とうべーと云けれど
 おまえ

女更に言ひて。王氏も笑ひて帰つた。夫うらり女を晝夜郢郎がる。然
 ひ懲りて居たる。數日過け。是れ何の耗も。王氏も來ざり。けど
 持ち官家の郎君。由来。父の職業を厭ふ。脩拾せざるやと疑ひ。今も
 念の堪兼て。食も進やう。夜も寝らき。遂に疾しき成ゆる。王氏も
 み言に入る事無。子の違和是故。非ざるやと云けれど。女赤面する。良
 久く。歎く云。我既に懸念して。ひ直り難い。但郢家找家
 の寒賤を嫌ひ。即媒を以て言ふ。妾が疾を即愈へ。若私約を
 う衛へ不可こと云けれど。王氏頷いて帰つた。此王氏も初時より
 郡主の宿人と云者と私通へを。既に龔氏の婦と成。後も宿人夫

の他出を偵て輒舊好を尋る。是夜も宿へ來りけり。王氏女の言
ふを述く笑ひ戯き且鄂郎が致意を囁く。宿へも此女の美
事と久く知りけども寄語ふ階無き恨み居ゆが是は詫び
く竊ふ其機ふ來まべと喜び王氏と謀らんと名ひあが彼と謀ぶ
必を妬む事くと思ひ假よ無心の詞をうふ。女の家の閨闥の事代委く
尋ね向くかふ収め次の夜垣を踰て下家へ忍び入ア。直ちに女の閨の閨
を。指ゆく窗を叩たけども内へやと女の聲多く誰そと問。宿へ小語
く鄂生と答ふ女云妻が君をゆひ奉る百年の久しき願ふ。何ぞ今
宵一夕の歡を成さう為ゆくんや。君真成よ妻を愛さうかわづか速く不
水入を情く礼を正しく迎へ。若説合あづか取て命又從ひ參トキ

と云ひまだ宿へ苦々纏腕を握りて。後の信せんと求む。女乞を拒
きも。すまと。と難く忍ひ疾を力く扉を啓ひたまし。宿直も入て抱だ着く。歡を求んと
云ひまだ。女驚く撐拒んとまふ。病體力無くとも地上よ付る。宿へ是
を是く急く曳起て。女曰汝何くこや来る。惡少年ぞ。必鄂郎よ非
1. 鄂郎ハ温順。妾が病る由を知て玉を必相憐恤すべ。何故
自此の如く狂暴き。其の成爲玉さんや。若猶今の如くせば便鳴呼へ。左
を以人よ知らさん。若人よ知りまば品行衝損く。君も我も益す。とりひ
けど宿へも假迹の敗露んる恐れ。復強く言を。但後會を請
け。女曰親迎を持玉へと云ふ宿へ。親迎まで甚遠し。願く近た日
を期せんと。昔く女糾纏をもてて衣冠。左あぐ病の癪を待玉へと云ひ

けと。宿介曰然と云信物を出せと云。女固く辭へと許さずけと。宿介
女の足を捉へと。繡履を解く持去る。女云。喪物已よ君がより入る料る
と。必反へ。王下ト。君若心負へと。妾を棄玉へ。妾但死せんのと云をや。放
と。必往ぬ。と。直よ王氏の所行く泊多が。かく履を忘れ。陰に衣袖を
端をもあくと。因く衣を振く冥索けと。王氏怪しき何を尋王云。宿
介己亥をゆき寔情を告く燈を取く遍く门外すでも索めけと。竟
と。見えど。爰か毛大と云者あり。巷中の生徒と游ぶ無藉の者也。嘗
と。王氏は懸想と挑けと。王氏從毛大をかう。宿介王氏と通じ
と。彼等二人が密事を見あそびて。王氏を脅へんと。兼て巧く居
と。此夜來く其門を推す。未宿むと。啓をと。潛入と。潛入へと。窗の下
と。

み到る時。興ある。絮帛の如死物を踏つて。拾ひ視て。巾ふ包ふ。女罵
り。怪へと。名ひき。先懷に入ると。伏て。聽のく。宿介が自述を。懲悔を
喜ぶる。限。抽身へと。潜ふ出と。去る。斯く四五日を踰く。毛大夜
牆を越へ。十翁家は忍びへ。門戸の結構を悉ぞりけと。誤く。十翁
が舍と。十翁窓下を窺ひ。一人の男子子来る。其音跡察と
る。女の所へ忍び来る者と知り。刀を握く。直ふ出る。毛大大よ驚き
走る。十翁追懸て。己ふ近く成り。けと。毛大急く逃る事成ざ。毛
大を反へ。刀を奪ふ。此音ふ驚き。媼も起上り。大ふ叫びけと。毛大か
トと覺悟へ。遂に十翁を殺へ。逃去する。女も此喧を傳へ。起坐す
とも。もろひ。毛大翁の脳裂く。言ふ。成ら。俄頃ふ息絶ぬ。媼牆の

下ゆく繡履を浴ぐ。能視焉。臘脂カヒ物也。怪しき逼問アシキけと。女隠す。能をふ。大ふ笑へ。寔情を告ぐ。乃は對戸カミ。王氏カミ。名を生アリ。小忍アリ。只鄂郎カミ。自来アリ。と云々。乃は詫アガフ。婢メイド。訴アガフ。と。詫アガフ。婢メイド。殺スル。差し。鄂生カミ。拘ハシマツ。鄂生カミ。其性謹慎アシキ。言訥アガフ。温ムサシ和ハシマツ。者アリ。今辛十九歳カミ。成カミ。常アリ。客アリ。對アガフ。羞アヒ。洗事童子アヒタコトの如アリ。此夏カミ。夢アリ。も知アリ。執ハシマツ。大アリ。駭アヒ。魄アヒ。失スル。衙門アガフ。來アガフ。堂アガフ。上アガフ。詞アガフ。出スル。成カミ。惟戰慄アヒタク。居アガフ。邑宰錯アガフ。認アガフ。斯恐アガフ。下翁アヒタク。殺スル。疑アヒタク。と。察アガフ。横アヒタク。措械アガフ。加スル。鄂生カミ。痛楚アヒタク。堪スル。遂アガフ。誣アガフ。眾アヒタク。服アヒタク。其罪極アヒタク。郡アガフ。解スル。郡アガフ。亦アヒタク。詫アガフ。婢メイド。如アリ。其情を察せ。鄂生カミ。冤氣填塞アヒタク。毎アガフ。女アヒタク。同質アヒタク。と。名アヒタク。居アガフ。女アヒタク。遇アガフ。時

み至アヒタク。女外心アヒタク。憤アヒタク。不堪アヒタク。ひつも詰アガフ。鄂生カミ。氣アヒタク。奪スル。古借アヒタク。のふアヒタク。能アヒタク。一言アヒタク。荅アヒタク。爲スル。罪アヒタク。衆アヒタク。鄂生カミ。歸スル。死罪アヒタク。定スル。あり。往アガフ。來アガフ。覆アガフ。訊アガフ。數官アヒタク。經アガフ。共アヒタク。謀議アガフ。其後濟南アヒタク。地アヒタク。復案アヒタク。み縷アヒタク。太守アヒタク。吳南岳アヒタク。と云アガフ。一。鄂生カミ。風采アヒタク。人アヒタク。殺スル。類アヒタク。者アヒタク。非アヒタク。と。名アヒタク。甚アヒタク。疑アヒタク。か。竊アヒタク。陰アヒタク。人アヒタク。使スル。私アヒタク。鄂生カミ。向アガフ。鄂生カミ。冤情アヒタク。以スル。荅アヒタク。南岳アヒタク。已アヒタク。鄂生カミ。冤アヒタク。先臘脂アヒタク。向アガフ。曰アガフ。汝アヒタク。訂約アヒタク。後アヒタク。外アヒタク。知アヒタク。者アヒタク。有アヒタク。否アヒタク。女アヒタク。答アヒタク。曰アガフ。知アヒタク。者アヒタク。無アヒタク。一。又日。鄂生カミ。塙アヒタク。入スル。時アヒタク。別アヒタク。人アヒタク。知アヒタク。る。有アヒタク。否アヒタク。亦アヒタク。荅アヒタク。日アヒタク。知アヒタク。者アヒタク。嘗アヒタク。無アヒタク。乃は鄂生カミ。喚スル。上スル。吳公アヒタク。問アガフ。鄂生カミ。日アヒタク。曾アヒタク。其門アヒタク。過アヒタク。一時。舊鄰アヒタク。婦アヒタク。王氏アヒタク。と。一。少アヒタク。女アヒタク。門アヒタク。在スル。某。趨アヒタク。過アヒタク。侯アヒタク。共アヒタク。並アヒタク。す。

一言も較びと云ふ。吳公女を叱りて曰。汝適別ふ他人無一と云ふ何故ス。鄰婦を言ふと云ふ。刑を用ひと云ふ。女懼りて曰。其時王氏側に在と雖。彼寔は闇歩る事あり。吳公命トモ王氏を拘へし。王氏至きび固く禁む。女と通せし者。吳公王氏又曰。下翁を殺せし誰人ぞ。王氏對て知候をと云ふ。吳公詎と曰。臍脂供言ふ下翁を殺せる者。故悉み知る。と云ふ。汝胡ぞ隠匿の不得んや。王氏大よ呼く曰。婉哉淫婢。故自免。男子を欲む。其時我媒合せんと云ふ。實ふ戯也。彼自奸夫を以て院み入る。我何ぞ是を知らん。吳公細み詰玉ひけど。王氏始鄂生アシ。門前を過り。一時相戯。詞前後具悉ふ供へ矣。吳公又女を呼んで怒く曰。汝王氏を此事ふ與らざりと云ふ。然ふ今王氏女を取らむと

りあく何ぞ。女流縁アラタマツ。答曰。自己不消すく父の慘死を致させ。更ニ又他人を累するふ忍び。頗る相公察アサヒ。王へ公又王氏の間アシ。既ふ女ふ戯。後此事を何人よ語アシ。王氏入よ語アシ。の誓て無と供アシ。吳公怒アシ。十指を縛アシ。せしと命アシ。王ひきと。婦アシ。已事を得ず寔を供アシ。曾く宿介アシ。と云者アシ。告うと云々。吳公立所アシ。鄂生アシ。械アシ。宿介遂アシ。供アシ。を繩アシ。速ふ宿介を拘へし。宿介至く曾く知アシ。由を供アシ。けど。吳公曰。諭アシ。女宿アシ。と云ふ。良士アシ。非アシ。と云へ。故既アシ。王氏アシ。此事をき聞く。何ぞ知アシ。と云ふ。故得んと。嚴く械アシ。宿介遂アシ。供アシ。云。女の家アシ。女を賺アシ。眞アシ。有アシ。とも。履アシ。失アシ。後アシ。敢く復往アシ。是故アシ。下翁の殺アシ。情アシ。寔アシ。知アシ。と云々。吳

公益怒々嚴く械一色。宿分凌籍不堪。據も。遂々自承。一
けむ。依々吳公招成と報上。王は是成。僕人皆吳公を神と稱せば
き。宿分も今れ為方き。唯首を延べ。秋決を待つ。時々此頃学
使施公と云。賢能の名え有る。衆人皆施公を最と稱す。是も因々
宿分便宜を求り。寃の狀を控え。施公其招供を討め。又覆疑思
案を拍々大歎。寃の狀を察。宿分寢又寃うる。遂々院司ふ詣
く。案を移へ。再鞫。玉ふ。施公先宿分に向て曰。鞋へ何の所よ遺
しる。宿分供へ。曰。其處を覺え。共。王氏が門を叩く。す。袖中
ふ在へ。施公轉王氏ふ詰く。曰。宿分が外。奸夫幾人。ある。王氏供へ。
曰。身宿分と。難歯。よやとの交合。未謝絶せ。其後も。逃れる者多
い。

非ざといど。寔ふ從をもと云。施公因々其人の姓名を指言へ。も
み王氏供へ。同理のモ大屢。逃げ。共。固く拒く。從へ。施公又問て曰。
女が夫遠く出久く帰ら。故ふ。來る者無。や。王氏曰。有。某
甲某乙。皆借貸餽贈を以て。二次。妾が家ふ出入致せ。と云。是皆巷中
の游蕩子。王氏。又。有。と。未發言せる者共。施公悉其者共
の名を藉く。拘へ。既ふ皆拘へ。集て。是。施公自引率て。城隍廟。赴
き。盡く神前。案の前。平伏せ。告く。日。曩夜夢。神人來。我
ふ告。その玉。人を殺。者を汝等四五人の中。在と教へ。玉ふ。汝ら如。早
く。自首せ。寛宥。輕罪。處。と。言聞せ。共。皆同聲。寛
無。と。供。施公曰。汝等既ふ自招せ。神來。必捐。玉々。と。云て。



使人モル命スル。齋或セシ禱モモチを用スル。社殿の牘カマツを悉スル障塞ヨシガをもスル暗黒ムラカミす。諸囚チカラヲ共モミタツを皆モミタツ兩祖セシ。背アキハを露アキハ。暗中アキハふ驅入スル。盆ボウ水ミズを入スル。人ヒトどモ自モリ鹽ソウへモリ詫モリ。是モ壁下カミシタふ繫スル。立スル。戒モリ。壁カミふ向スル。動ムく。無モかクし。且モ告モリ。神來モモチく。入スルを殺スル。者ヒトの背アキハふ字シグニを書スル。王モモチべスル。と云ハシメ。殺スル。賊ゾウとモ。毒刑モリ。遂スル盡スル。其モリ寔モリを吐スル。是モハ施公モモチ先人モリを。せスル。戸ドを閉スル。少スル間スル。喚モリ。驗視モリ。毛大モモチを指スル。曰モリ。真モリ。下翁モモチを。殺スル。者ヒトを神モモチ來スル。背アキハ中モリふ字シグニを書スル。玉モモチかと云ハシメ。彼モリせスル。故モリふ入スルを殺スル。者ヒト心中モリ。小スル見スル。畏モリ。壁カミふ向スル。背アキハを壁カミふ匿スル。故モリふ背アキハ中モリふ灰色モリ着スル。又モリ外モリへモリ。猶恐モリ。背アキハを護スル。故モリふ烟色モリ着スル。施公モモチ贈モリ。其モリ文モリ。

最初モリより此毛大モモチを疑スル。是謀モモチす。忽見モリ是毛大モモチ遂スル。其罪モリ伏スル。此案已モリ結スル。施公モモチ判モリを書スル。東昌モモチの邑宰モモチ。

宿分祇縁モモチ兩小無猜モモチ遂野鷺如家雞之戀モモチ爲因一言有漏致得罷興望蜀之心幸而聽病燕之嬌啼猶爲玉惜憐弱柳之憔悴末似鷺狂而釋公鳳于羅中尚有文人之意乃刲杏盟干穢底寧非無賴之尤蝴蝶過牆隔牕有耳蓮花卸瓣隨地無踪假中之假以生冤外之冤誰信是寃稍寬笞朴折其己受之刑姑降青衣開彼自新之路毛大魄奪自

色
人
下

と書送を乞ひ邑令冰入とうまく。鄂生が為み委禽へ遂ニ嫁入
く。臘脂を鄂家み送を名と名。

天魂攝干地浪來槎木直入廣寒之宮逕泛漁舟
錯認桃源之路遂使情火息焰慾海生波刀橫直
前投鼠無他顧之意冠窮安往急兔生返噬之心
風流道乃生惡魔溫柔卿何有此鬼蜮哉即斷首
領以快人心臘脂身雖未字年已及笄爲因一线
纏繫致使群魔交至爭婦女之顏邑恐失胭脂惹
鷺鳥之紛飛並名秋隼歲徃自守幸白壁之無瑕
繩紗苦爭喜錦衾之可覆嘉其入門之拒猶潔白
之情人遂其擲果之心亦風流之雅事仰彼邑令
作爾冰人

